

11

小説

ブルーロック

BLUELOCK

原作

金城宗幸

絵

ノ村優介

文

吉岡みつる



CONTENTS

第158話	第157話	第156話	第155話	第154話	第153話	第152話	第151話	第150話
全ての瞬間を ^{すべ}	カイザー	B ^バ A ^ス S ^タ T ^リ A ^リ R ^ド D	新英雄大戦 ^{ネオ・エゴイストリーグ}	指導者 ^{マス}	環境 ^{かんきよう}	再始動 ^{さいしどう}	変わる世界 ^{かへるせかい}	休暇 ^{きゆうか}
115	103	92	82	69	58	43	28	4



第
167
話

C
R
O
S
S
F
L
O
W

215

第
166
話

器うつわ

206

第
165
話

神かみ
に与あたえられし

197

第
164
話

蝶バタフライ

185

第
163
話

体現者たいげんしや

174

第
162
話

カイザーインパクト

166

第
161
話

蜂撃ビーシヨット

156

第
160
話

ジンガ×モンスター

140

第
159
話

覇道はどう

130



第150話

休暇



アンダートゥエンティにほんだいいよう
Uー20日本代表 vs. “青い監獄” イレブン 11傑――。

勝てば “青い監獄” が Uー20日本代表をジャック。負ければ “青い監獄” は消滅……
という一世一代の大勝負に、見事勝利した潔世一たち。

日本中を沸かせた大勝利によって、“青い監獄”の存続は守られた。

そんな、歴史的な試合の翌日――。

潔をはじめとする “青い監獄”の選手たちは、二週間の “休暇”をもらえることになった。

入寮のときに回収されたままになっていたスマホや財布が返却されて、“青い監獄”の外に出ることが許されたのだ。

「ブルーロック 総指揮・絵心甚八なりの、劳いの気持ちらしい。」

「はい。これが、あずかった潔くんの私物です。」

「……どもです。」

「潔は、ブルーロック 職員の帝襟アンリから、スマホと財布を受け取った。」

「ひびく 久々のマيسマホ！」

「高校に通っていたころは毎日使っていたのに、今では、ないことが当たり前になってしま

まった。」

「ひとまず……最初の連絡は家族に。」

「休暇のこと、これから家に帰ることを伝えて、潔はひとときの『脱獄』をする。」

「あら、世つちやん。帰ってきたと思ったら、すぐお出かけ？」

「荷物置いて着替えたと思えば、すぐに玄関へ向かった潔に、母が声をかけた。」

「うん、ちよつと……。友達と、遊び行く。」

靴紐を結びながら、潔は少しきこちなく答える。

これから会うみんなを「友達」と呼ぶのは、なんだか気恥ずかしい感じがした。

「ブルーロック 青い監獄」の中では、ときに高め合う「仲間」だったり、蹴落とし合う「敵同士」だったり、超えたい「目標」だったり。

でも、そこから一歩外に出ると……やつぱり「同年代の友達」になるんだろう。

それが、なんだか不思議で、少しでも特別な感じがした。

そんなことを思いながら向かった先は——渋谷。

スマホのマップを見ながら、約束のカフェにたどり着くと、テラス席に座る二つの影が見えた。

「お！ 潔来た。」

長い赤髪を揺らして、千切豹馬が顔を上げた。

「おっすー！」

蜂楽廻は元氣よく立ち上がって、こちらに手を振っている。

当然、今日は二人とも私服だ。千切は、ワイシャツの上にニットセーターを着て、髪をポニーテールに結び上げている。蜂楽は、オーバーオール。はおったジャケットの胸には、好きな動物だという、イルカのブローチがついている。

「うっす、蜂楽。おっす、千切。」

レジで注文してきたドリンクを片手に、潔も二人に声をかけた。

すると蜂楽も、飲んでいたドリンクを見せびらかしてきた。

「うまいよ、このハチミツキャラメルクリームココアラテ♪ 飲む？ 蟻も溺死するほど

の甘さ！」

「ハハ！ 子ども舌！」

それを見て、千切が笑う。

「いらねーし！ ……てか、あれ？ メンバーこれだけ？」

二人しかいないのを見て、潔がたずねると……。

「ライチと二子は、誘ったけど来ないってさ。氷織も、実家遠いからNG。俺は、姉ちゃん

が東京住んでるからいけたけど。」

そう答える千切も、出身は鹿兒島だ。

氷織羊の実家は京都。たしかに、一人で来るには少し遠い距離かもしれない。
ライチじんごにこいつが参加しないのは……まあ、なんとなく予想できたけど。

「イガグリは実家の寺の手伝いで……我牙丸は、山にこもるからって連絡つかなくなつた。」

と、蜂巣が続ける。

イガグリこと五十嵐栗夢は、実家の寺を継ぐのが嫌という理由で、プロを目指している。今ごろ、イヤイヤ手伝いをさせられているであろう姿が目浮かぶ。

そして我牙丸吟は、変人ぞろいの「青い監獄」でも、特につかみどころのない野生児だ。あの超人的な身体能力は、山ごもりのなせる業……なのかもしれない。

「國神とかは、連絡先わかんなかったな。誘いたかったけど……。」

千切が名前を挙げた國神鍊介は、二次選考で脱落した、元チームメイト。

脱落したメンバーとは連絡先も交換していなかったから、もうこれきりなのかもしれない。そう思うと、少し寂しい。

「潔は誰誘ったの？」

蜂巢に聞かれ、潔はスマホを確認する。

「一応、凧は来るって言ってたけど……。あ、連絡きてる。」

メッセーシアプリのトーク画面に、ちょうどチャットが届いていた。

『いま起きた』

寝転んだ宇宙人のようなキャラクターが、「よろしくやって」と言っているスタンプが添えられている。

凧誠士郎——天才的な身体能力を持つ選手だが、私生活は究極の“面倒くさがり”である。

「アイツ……。」

凧は、監獄の外でも相変わらずだ。

それはさておき。数か月ぶりの外の空気に、潔は大きく伸びをした。

「んあ——！！ 久々の自由！ 最ッ高——！！」

「ヤバイよな！ 解放感！」

千切も、嬉しそうに言う。

「うん！ 外界、新鮮！」

うなずく潔に向かつて、蜂楽が身を乗り出してたずねた。

「何して遊ぶ？」

「なんでもいい！ 予定なし！」

「脱獄フリーダム！」

盛り上がる潔と蜂楽に向かつて、千切が「あ、そーだ。」と、スマホを手にとった。

「ニュース観た？ 二人とも。」

「なんの？」

そろって首をかしげる潔と蜂楽に、千切はニヤリと笑ってスマホの画面を見せつける。

「青い監獄、有名人！」

ネットニュースの記事だ。

タイトルは——『BLUE LOCKが日本サッカーに革命を起こす』。

「おお！ マジか!？」

「すげえ！　なんて書かれてんの!？」

二人に急かされながら、千切が記事を読み上げる。

《この試合は、糸師冴の代表初招集という名目で、注目を集めていた。

しかし、蓋を開けてみれば全く新しい驚きとスペクタクルを、我々に突きつける結果となった。

世界一のストライカーを日本に誕生させるという絵心甚八の夢物語が牙を剥き、このセンセーショナルなコンセプトチームの試合は、国内のみならず、世界のサッカーシーンの話題をさらっている。

この人気沸騰ぶりに、JFUFの不乱蔦氏は、『青い監獄』は日本サッカーの未来を創る。私の信じてきた道は開けた。』と答えている。》

「……だつてさ。」

千切が読み終わると、蜂楽はフンと鼻を鳴らした。

「よく言うよ、あの錢ゲバ狸。手のひら返して手首ねんざしろ。」

錢ゲバ狸——日本フットボール連合会長・不亂蔦宏俊こそ、
“青い監獄”を消滅させようとしていた張本人である。

「でも本当に、すげえコトしたんだな、“青い監獄”……。」

潔は、夢のような現実を噛みしめた。

あの試合が日本サッカーを大きく動かしたことは、ゆるぎない事実だ。

「ああ。“青い監獄”に入る前とは、何もかも、もう……ん？」

話していた千切が、不意に、潔の後方……道路を挟んだ向かい側のカフェに目をこらした。

「……ちよつと待て、あの店にいるのって……。」

「え？」

潔が振り返ると同時に、蜂楽が「あー！」と声を上げた。

「アイツら、じゃん!!」

よく見れば、反対側のカフェのテラス席に座っているのは、“青い監獄”イレブンの11傑のメンバー

だった。

「おいーつす！」

早速、蜂楽が突撃。

「おー、蜂楽！」

応えたのは御影玲王。あの御影コーポレーションの御曹司という立場ながら、W杯優勝の夢を追って、風と一緒に「青い監獄」にやつてきた。

「潔くん！ 千切くん！」

こちらに手を振るのは、雪宮剣優。メガネをかけた柔和な雰囲気、雪宮は、モデルとしても活躍している。

「なんでおんねん、お前ら!？」

コテコテの関西弁は、大阪出身の烏旅人。「凡」か「非凡」かで物事を判断する、独特な感性の持ち主だ。

そして、ネガティブマッチョの時光青志と、ミスター「オシヤ」蟻生十兵衛も同じテールを囲んでいる。

「こつちは普通に遊びだけ……。お前らこそ、何やってんだよ？」

潔がたずねると。

「え？ 普通に、株の勉強会。」と、玲王。

「あと、アパレルブランドの立ち上げの相談とか。」と、雪宮。

「将来の事に決まってるやろ。」と、烏。

「オシヤ最先端サミット。」

キリツと、蟻生がポーズを決めた。

「へ、へえ……。」

（意識高え組！）

同じ高校生の会話とは思えず、潔は顔が引きつる。

「あ、俺は聞いてるだけだよ。傾聴、傾聴……。」

時光が、控えめにつけ足した。

すると、輪から離れて道路をながめていた忍者の末裔・乙夜影汰が、不服そうに顔を上げ

げた。

「一緒にすんな。俺は渋谷の女の子の生態系チェックだし。」

「へ、へえ……。」

（乙夜は乙夜で意識高えだろ……！）

今度は、千切の顔が引きつった。

「せつかくだし、みんなで遊ぼう！」

蜂巢の誘いに、

「いいね！」

「の、乗った！」

雪宮と時光が賛成する。

「……風は？ 潔と一緒にじゃねーの？」

玲王が、潔にたずねた。

入寮当初は常に一緒に行動していた玲王と風だが、二次選考で別々の道をたどる決意を

してから、少し関係がギクシャクしているようだ。

「あー。寝坊で遅れるって言ってたけど……。お。ウワサをすれば……。」

いいタイミングで、潔いさぎのスマホに凧なぎから連絡れんらくが来た。

『そっち行く途中とちゅうでゲーセン見みつけたから、ちよつとやってくるので遅おくれる』
今度は「ほとぼしる俺おれ！」のスタンプ。

ゲームが大好きだいすな凧なぎだ。仲間なかまとの約束やくそくよりも、ゲームに目移めうつりしてしまったらしい。
この自由じゆうさが、凧誠士郎なぎせいしろうである。

「みんなで凧アイツのことシメいく？」

蜂巢ばちうらの提案ていあんで、さつそく、凧なぎのいるゲームセンターに向むかうことにした。

（うつしや。十六連勝れんしょう。オンラインランキング、アゲアゲ……。）

アーケードの格ゲーかくの前に、目立めだつ白髪はくはつの高校生こうこうせい——凧なぎが座すわっている。

ワンゲームだけ、と思おもっていたのに、運うんよく勝ちまくり、台だいから離はなれられなくなっ
てしまった。

潔^{いさぎ}たちとの約束^{やくそく}があることはわかってはいるけど、まあ、ちよつとくらい、いいよね……
と、思^{おも}つていた凧^{なぎ}の後^{うし}ろから。

「おい、そのゲーム廃人^{はいじん}面倒臭^{めんどうくさ}王子^{おうじ}……友達^{ともだち}なくすぞ。てめえ、コラ！」

「うぎよ！」

鳥^{カラス}がヘツドロックを決^きめ、蟻生^{ありゆう}が頭^{あたま}を押^おさえこむ。

「現行犯逮捕^{げんこうはんたいほ}お！」

玲王^{レイオ}のかけ声^{こゑ}とともに、凧^{なぎ}も無理矢理^{むりやり}合流^{ごうりゅう}したのだった。

ゲームセンターといえば、やっぱり欠^かかせないのはクレーンゲーム。

「見^みよ、俺^{おれ}の『FLOW』！」

忍者^{にんじや}・乙夜^{おとや}の技術^{テラニツク}が光^{ひか}り、ついにアームがぬいぐるみの頭部^{とうぶ}をガシツと持^もち上^あげた。

……けれど、となりに立つ蜂楽^{ばちら}と時光^{ときみつ}は。

「いける！」

「いけるよお！」

興奮のあまり、台に貼りついて、ガラスをばしばし叩いている。

「アホ！ お前ら、揺らすな！」

そんな二人に、烏はハラハラしっぱなしだ。

続いては、ダーツ。

雪宮が投げたダーツは、見事、的のど真ん中に突き刺さった。

「ブル！」

「オシャユツキー！」

玲王と時光からはやし立てられ、雪宮は蟻生のマネをして決めポーズ。

となりのブースでは、遅刻魔の屈が的の前に立たされていた。

「ごめんなさいでした……。」

屈の頭スレスレを狙って、潔、千切、蜂楽がダーツを構える。

「動くな、屈。」

「罰ゲーム執行じゃ！」

もちろん実際に当たることはなかったが、くれぐれも危険な遊び方はしないように。

……と言っても、「ブルーロック」を出れば、潔たちも普通の高校生だ。

ビリヤードで遊んでいた蟻生と乙夜も、すぐにふざけ出した。

蟻生は、ボールをつくための棒を背中に回し、髪をなびかせながら、いちいちもつたいぶつて打つ。

乙夜はといえば、平行に構えた棒の上を、バウンドしたボールが飛び越したのを見て、

「お！ 棒高跳び、記録更新！」

と、歓声を上げた。

「せやから、普通に打って！」

我慢できずに、烏が叫ぶ。

見ていた時光は、純粹に目を輝かせて、

「へえ。ビリヤードってこーやるんだ！」

と感動しているが、もちろんそんなわけではない。

ダーツもビリヤードもともに勝負にならず、今度は卓球で対決することになった。

潔&千切ペア vs. 凧&烏ペア。けれど、そこに玲王が「しりとり卓球」という新しいルー

ルを追加した。

球を受けた風は。

「……みかん。」

「はい、アウト！」

「ドボン！」

すぐさま、潔と千切から指摘され、鳥の出番もないまま敗北。

またも勝負にはならなかったが、しばらくみんなで笑いころげた。

「カラオケ行かね？」

という玲王の提案で、今度はカラオケ店に入店したものの……。

「最低！ 誰、この女!!」

「どーゆーつもりで、デートとか言ったの!？」

廊下の先から、二人の女性の怒鳴り声が響いてきた。

「ちよ、待ってよおー。いいじゃん、三人で楽しめばさあー。」

部屋から出ていこうとする女性の手を、部屋の中にいる男性がつかむ。

すると、女性はその手を振りほらい、男性の頬にカウンターの平手打ちが炸裂。
「触んな！ この浮気クソ男！」

「信じられない！」

女性たちは男を見捨てて、さっさとカラオケから出ていってしまった。

「うわちゃー。」

物珍しそうにながめる蜂楽に、玲王が「見るな、見るな。」と笑う。

潔も、初めて見る男女の修羅場に好奇心がくすぐられ、こっそり部屋の中をのぞいてみ

た。……すると、たった今叩かれた人物に、なんだか見覚えがある。

少し日本人離れた顔に、伸びたヒゲ。極めつけの色ちがいの瞳。

「……え。あ！ 愛空!？」

「痛つてえ……。お？ お前ら、おつす。」

頬をさすっているのは、まぎれもなく、Uー20日本代表主将オリヴァ・愛空だ。

「お前、あんだだけサッカーじゃ頼りになるのに……。外じゃだらしなタイプかよ。」

玲王がからかった。

「結構、年上のお姉さんたちだったよね？」

「デیفエンスでできなかった？」

潔と蜂巢からツツコまれても、愛空は気にしない様子で笑う。

「へへへ。見られちゃったなあ。……お前らも休暇か？ Uー20もみんないるぜ。」

「え？」

……つてことは。

愛空に案内された別室には、Uー20日本代表のレギュラーメンバーが勢ぞろいしていた。

「タマシイレボリユーション!!」

「二階席いい!!」

ミラーボールがガラガラ回り、タンバリンにダンスと、全力でカラオケを楽しんでいる。

「あ！ 潔世一！」

S Bの音留徹平が入り口の潔たちに気づき、マイク越しに叫んだ。

「ああん!?」と、エースFWの閃堂秋人がにらむ。

「憎き宿敵、青い監獄」。

「何しに来た、おめえらあ!?」

独特なボディペイントのSB・蛇来弥勒と、強面のCB仁王真も、潔たちにガンを飛ばす。

「いや、別に……。たまたま近くにいたから……。」

潔が後ずさると……。

「あれ? 愛空じゃん!」

そこに「青い監獄」の残りのメンバーが合流した。

「喧嘩?」と、風。

「おーおー。みなさん、おそろいで。」指の骨を鳴らすのは烏だ。

「加勢しようか、潔?」

雪宮と、蟻生、乙夜も臨戦態勢だ。

「よっしゃ! じゃあせつかくだし、晩飯でも賭けて……ボウリング対決といきますか。」

一触即発の「ブルーロック」とU-20日本代表は、愛空の提案で、ボウリングで決着をつけることになったのだ。

ボウリング場についた潔たちは、受け付けを済ませ、登録用紙の名前欄にニックネームを書いていく。

「おれの名前、『かいぶつ』にしてくれ♪」

蜂楽が言う。

「俺は『オシャ仏』で。」と、蟻生。

「俺は『ニンジャリバンバン』。」と、乙夜。

「うっさい！ ボケA・B・Cでええか？」

それを書きとめていた烏は、うつとうしそうに言う。

普段の試合では冷静な司令塔の烏だが、クセの強さが「非凡」なメンバーたちに囲ま

れ、完全にポジションは「オカン」だ。

潔が、ふと近くのレーンに目をやると……。

ツンツンに逆立てたヘアスタイルの男性が、真剣な表情で球を投げていた。

「え、ちよまつ……。あそこで一人でやってる人、なんか見覚えが……。」

無駄のない洗練されたフォームで、見事ストライクが決まった。

「なんと美しいオシャフォーム！」

「すっげー！ 上手すぎ！」

蟻生と千切がベタ褒めするなか、蜂楽が声を上げた。

「てか、あのツンツン頭！ 馬狼じやーん!!」

不機嫌そうに寄った眉間のシワ。『X』の形の剃りこみ。まさしく、王様・馬狼照英だ。

「マジ？」

「何やってんだよ、お前ー。」

風や千切にぞろぞろと囲まれると、馬狼はこめかみに血管を浮き立たせて、潔たちをに

らみつけた。

「んあ!? なんでいんだ、お前ら!? 俺の趣味の聖域に!」

怒鳴る馬狼のことなど意に介さず、自由人の屈がボールを手にとる。

「これマイボール? すげー。」

「汚え手で触んな!!」

「次投げていい?」

今度は蜂楽が、馬狼のレーンに勝手に立っている。

「殺すぞ!」

潔と千切は、必死な馬狼に腹を抱えて笑った。

馬狼という強力な味方を手に入れて。

いざ “青い監獄” vs. U-20 日本代表、エキシビションマッチ!



第151話

変わる世界



ブルーロック
青い監獄

vs. U-20日本代表ボウリング対決！

両チーム、見ごたえのある攻防を繰り広げ……手番が回って、千切の番だ。

「ほい。」

最後に残った一本を見事に倒し、スピア！

「しゃあ！ ナイスお嬢お!!」

「接戦！ 接戦！」

これで、U-20日本代表を追い詰めた。

「お互いラスト一投で決まるぞ！」

玲王がとなりのレーンに声をかける。

アンダートゥエンティにほんだいいよう
Uー20日本代表チーム、次の手番は蛇来だ。

「頼むぞ、蛇来！」

「超集中う!!」

はやし立てる周りの声など聞こえない様子で、蛇来はぶつぶつ何かをつぶやいている。

「……ゴラッソ仏よ。我に力を与えたまえ……。南無妙法蓮GET GOAL。南無妙

法蓮GET GOAL。」

めちやくちやな念仏を唱えようと、蛇来は大きく腕を振り上げる。

「エル・ゴラッソ!!」

「スーパーゴール」を意味するかけ声とともに放たれたボールが、レーンを滑走してい

く。

息をのむUー20日本代表チーム。

祈りが通じたのか、なんと蛇来の球は、ストライク!

「うおおお!!」

「蛇来! 蛇来!」

「ゴラツソ仏え!!」

アンダーウエントにほんだいひよう

Uー20日本代表チームは、勝利を確信して大はしやぎ。

いよいよ、青い監獄^{ブルーロック} チームはあとがない。

「うああ……! クソ……もうストライク取るしかない……!」

「それで同点……!」

時光^{ときみつ}と蟻生^{ありゆう}は険しい表情^{けわひようじよう}だ。

「頼む!」

「いけ! こっちのラス投^{とう}!」

雪宮^{ゆきみや}は祈^{いの}るように手を合わせ、烏^{カラス}が声^{こえ}をかける。

「風い!」

青い監獄^{ブルーロック} チーム、最終投者は風^{なぎ}だ。

サッカーでは天才^{てんさい}的なプレー^みを見せる風^{なぎ}だが、ここはボウリング場^{じよう}。風の脳内^{のうない}は、すで

に関係^{かんけい}のないことでいつぱいだった。

（お腹^{なか}へったなあ……。汗^{あせ}もかいたし……。おフロ入^{はい}りたい……。）

そんなことを考えていたせいか、^{かんが}風は大事^ななところで足^{あし}を滑^{すべ}らせ、レーンにべしやりと倒^{たお}れこんだ。

「うべつ。」

その瞬間^{しゅんかん}、^{ブルースロック}青い監獄[〃] チームは敗北^{はいぼく}を覚悟^{かくご}した。

それでも、ぼてつと投げ^な出^だされたボールは、ゴロンゴロンと頼^{たよ}りなくレーンを滑^{すべ}っていき……。

コロンコロンカラン。

なんと、十本^{じゅんすべ}全てのピンが倒^{たお}れ——ストライク！

「んあ？」

ぽかんと顔^{かお}を上げ^あた風^なの周^{まわ}りに、チームメイトがどつと押^おし寄^よせた。

^{ブルースロック}青い監獄[〃] vs. U-20日本代表^{アンダーエッセイにほんだいいょう}、勝負^{しょうぶ}はまさかの引き分け^{ひきわけ}！

……そんな、ボウリング場^{じやう}の中でもひとときわ盛り上^{もあ}がっている一角^{いっかく}を見て、場内^{じやうない}の女子^{じよし}高生^{こうせい}が足^{あし}を止^とめた。

「ねーねー、あの人^{ひと}たちって……。」「

「え……やばい！ サッカーの!?」

「私わたし、テレビで観みたよ！」

次第しだいに、周まわりにいた女性客じょせいきやくも集あつまってくる。

「すごおい！ 本物ほんもの!?」

「U-20日本代表アンダートゥエンティにほんだいひょうじゃん！」

「あの人ひと、カッコいい！」

「サインもらおつかない！」

それを聞き逃きのがさなかったのは、モテに貪欲どんよくな乙女おとやと閃堂せんどう。

「サイン？ いいよ。このあと予定よていある？」

「四人にんでカラオケ行いかない？」

すぐさま女おんなの子こたちを口説くどきはじめた。

「おい。まだ決着けつちやくついてねーぞ！ ボウリング延長戦えんちようせんな！」

二人ふたりに呼びかけよる愛空アイクに、潔いさぎは時計とけいを確認かくにんして、声こえをかける。

「ゴメン、愛空アイク！ 俺おれ、ちよつと別べつの友達ともだちと会あう約束やくそくしてて……。」

すると、千切ちぎりと蜂楽ばちらがぶーつと口くちをとがらせた。

「えー。」先帰さきかえんのー。」

「俺おれも帰かえるー。」

便乗びんじようして帰かえりたがっている風なぎは、ガッツリ蜂楽ばちらに押おさえこまれている。

「またな、みんな！ 楽たのしんで！」

メンバーに別わかれを告つげ、潔いさぎは、最寄もより駅えきへ向むかう路線ろせんのホームで電車でんしゃを待まった。

（あー。楽たのしかった……。ゴラツソ仏ぼとけヤバかったー……。）

さつきまでの対決たいけつを思おもい出だして、自然しぜんと口元くちもとがゆるみそうになる。
すると……。

「あの……すみませーん。」

突然とつぜん声をかけられて、潔いさぎは振ふり返かえる。

そこには、若い夫婦わかふうふと小学生しょうがくせいくらいの男の子おとこが立たっていた。

「潔選手いさきせんしゅ……ですよね？」

「え……はい……。」

少し身構えながら、潔はうなずいた。

「うわ、すごい！ 本物だ！」

「こないだの試合、観ました！ 息子がファンなんです！」

夫婦は男の子の背中を押して、潔の正面にいざなう。

「へ……？」

（ファン……？ ……俺の？）

困惑する潔に対して、男の子は瞳をキラキラ輝かせる。

「最後のゴール、超カッコよかったです……!! あ……あの……!!

潔選手と、ブルー

ロックが大好きになりました……!!」

そして、少し緊張した様子で、こう言った。

「あ……握手してもらっても、いいですか……!？」

「お……うん。全然……。」

潔が差し出した手を、男の子は大切そうに両手で握りしめた。

「ありがとうございます！」

「よかったなあ！」

夫婦が、潔にむかつて頭を下げた。

「これから頑張ってください！ 僕もいつか、潔選手みたいです……!!」
電車に乗りこんだ潔に向かって、男の子は大きな声で叫んだ。

「はは！ ありがとねー！」

男の子に手を振りながら、潔は胸がいつぱいになった。

すでに、自分も、なっているのだ。

誰かのあこがれに。誰かの夢に。

本当に、変わったんだな……。

……いや。

俺が、変えたんだ。

俺のゴールで、この世界を。

電車でんしゃを降りて、潔いさぎが向むかったのは、いつも練習れんしゅう帰がえりに通とおっていた土手どてだ。

そこに、懐なつかしい姿すがたが立たっていた。

「おい、潔いさぎ！ ひつさしぶりい！」

潔いさぎが通かよっていた一難いちなん高校こうこうサッカー部ぶのチームメイト、多田ただ友也ともなり。今日きょうも部活ぶかつ帰がえりなの
か、ジャージ姿すがたにエナメルバッグを担かついでいる。

「覚えてる、俺おれのコト？ 忘わすれてない？」

多田ただは、変かわらないひょうきんな口調くちようで、開かい口こう一番いちばんそう言いった。

「いや、覚えてるよ！ 高校こうこうのチームメイトだぞ!?」

潔いさぎは笑わらって、

「まあもちろん、多田ただちゃんが外はずしたシュートも覚えてるけど！」

と、しっかりと釘くぎを刺さす。

「うへえ！ やめちくりー。」

多田ただは、ふざけた顔かおをつくつて頭あたまをかいた。

全国^{ぜんこくこうこう}高校サッカー選手権大会、県大会決勝。一難^{いちなんこうこう}高校は無念^{むねん}のうちに敗北^{はいぼく}したが、あの苦^{にが}い思^{おも}い出^でも、こうして笑^{わら}い話^{ばなし}にできるようになった。

それに……あのときの敗北^{はいぼく}がなければ、潔^{いさぎ}の現在^{いま}は、もっと別^{べつ}のものになっていたかもしれない。

「しつかし、ヤベーな潔^{いさぎ}お前^{まえ}！ 一晚^{ひとばん}で日本^{にほん}サッカー界^{かい}のヒーローじゃん！」

「やめろよ！ そこまでじゃねーだろ。」

大げさ^{おお}に褒め^ほめられて、少し^{すこ}照^てれくさい。

「いやあ。ちよつと前^{まえ}まで俺^{おれ}のとなり^{なり}にいたヤツがスターだもん！ 人生^{じんせい}わかんねえもんだよなあ！ サインくれよ！ 自慢^{じまん}するから！ あの潔^{いさぎ}世^よ一^{いち}とツートップ組^ぐんでたんだぜつて！」

「おい、ちよつとバカにしてんだろ？」

「あ、バレた？ ハハハハ！」

久しぶり^{ひさ}に話^{はな}しても、多田^{ただ}の雰囲気^{ふんいき}は変^かわらない。

「そーいや、ウチつてどーなってるの？ 一難^{いちなんこうこう}高校サッカー部^ぶ……次^{つぎ}は俺^{おれ}らが三年^{ねん}で、ラ

ストイヤーだよな？」

潔が聞くと、多田は「ああ！」とこぶしを強く握りしめた。

「目指すは、あと一歩で届かなかった全国だ！ ワンフオーオール、オールドフオーワン！
一難魂！」

「はは。なんか懐かしいわ、そのフレーズ。」

「エゴ」こそが全ての「青い監獄」は、一難高校のスローガンとは対極だ。

「潔も、いつでも戻ってこいよ！ 一難はお前のホームだからな！」

「おー。サンキュ、多田ちゃん。」

チームから離れても、こうして迎え入れてくれるのは嬉しい。

高校に通っていた日々に戻ったみたいで、なんだか楽しかった。

すると、不意に多田が言った。

「でも、お前ってマジ「ラッキー」だよなあ。ラストワンプレーのあの『ごつつあんゴール』……100パーセント「運」だもんなあ！」

潔は、耳を疑った。

「……え？ 『ごつつあんゴール』……？」

「え？ だってあのボール……たまたま、お前のトコに落ちてきたただけだろ？」

（……は？）

シヨックで、言葉が出なかった。

U-20日本代表戦の最終ゴールは、潔が全力を懸けて奪い取ったゴールだ。そこにボールが落ちてくることを予測していたし、全ての行動は必然だった。

「あー。俺も『青い監獄』行ったら、ワンチャン今ごろヒーローだったのになあ！」
冗談めかして言う多田は、本当にそう信じて疑わないようだった。

「潔、お前あのゴールで、人生の『運』全部使ったんじゃないやね？」

「はは……。」

上手く笑えない。

潔にとっては、『青い監獄』での努力の全てを否定する、残酷な言葉だった。

あのゴールが……『ただの運』かよ。

「ん？ 俺、なんか変なコト言った？」

多田が、潔の顔をのぞきこむ。

「たしかに……そーかもな。」

潔は投げやりに、そう答えた。

「ハハハ！ 変わってねーなあ、そーゆるーボートとした反応！」

能天気（のうてんき）に笑（わら）う多田（ただ）に、怒（いか）りとも、悲（かな）しみともいえない、やるせない気持（きもち）ちがわき上（あ）がる。

どれだけの想（おも）いで俺（おれ）が…… “青（ブルー）い監獄（ロック）” で戦（たたか）つてきたと思（おも）つて……!!

もちろん、多田（ただ）は “青（ブルー）い監獄（ロック）” の実態（じったい）を知ら（し）ない。だから仕方（しかた）ないことだ。

……だとしても。かつてのチー（チー）ムメイトと、もう二度（にど）とわ（わ）かり合（あ）え（え）ない次元（じげん）まで、隔（へだ）た（た）り（り）が生（う）まれてしま（し）ったのは事（じ）実（じつ）だ。

「じゃあ、またなー！　いつでも連絡しろよー。」

「おー。」

自転車にまたがった多田に手を振り返し、その後ろ姿を見送った。
次第に暮れていく夕空の下、潔はしばらく立ちつくしていた。

いや……。変わってしまったのは世界じゃなく、俺のほうだ――。

“青い監獄”に行つてなかったら……。俺も、多田ちゃんと同じように思つてたのかな。
自分が思つてるよりも俺は、“青い監獄”に染まつてしまったのかもしれない。

エゴイストたちの、戦いの世界に――。

選手たちが、それぞれの休暇を過ごしているころ。

絵心甚八は、新たな計画の準備を進めていた。

「ブルーロック
青い監獄」本部会議室。

絵心は中央のイスに座り、空中のパネルに投影されている。「商談相手」たちに対峙して
いた。

「Mr・絵心、それはビジネスとして成功するのか？」

「たしかに革命的なプロジェクトだが……リスクも大きい投資だねえ。」
各国の投資家たちが、たった今、絵心が提案した計画に好き勝手意見を述べる。

「ウチは乗るぜ。リスクとリターンは等分でなければ面白くねえ。」
中には、嬉々として賛同する物好きもいる。

「ハッ……。勘違いすんなよ、ビッグオーナーどもが。これは単なるビジネスではとどま
らない……。」

絵心は、唇をゆがめて、メガネを押し上げる。

「世界を巻きこんだ「青い監獄」第二段階。超弩級のエンターテインメントプロジェクト
だ。——世界一のストライカーを創り出す、超新星たちの「ビッグバン」が始まる。」
「ブルーロック
青い監獄」プロジェクト——次なる戦いが、もう目前に迫っていた。



第
152
話

再始動



糸師凛は、通いなれた堤防に腰かけて、一人、スマホの画面をながめていた。
掲載されたばかりのネットニュース。

トピックは凛の兄——糸師冴のことだった。

冴は、世界中から期待される若手MFだ。いつもは華々しいニュースばかりだが、
今日はちがった。

《糸師冴、ラストプレーに疑問の声——「ボール持ちすぎ」「セオリーならすぐパス」

一部ネット民大荒れで戦犯扱い。

糸師冴本人は、「見た通りの結果でしかない」とだけコメントしている。》

冴に勝つことだけが、凜の目標だった。
先日の試合は、冴に挑めるまたとない機会だったのだ。

最終局面——冴との1対1のマッチアップ。

あの瞬間、俺はたしかに兄ちゃんに勝った。

ぐちゃぐちゃに壊れるほうに、本能的にギリギリで攻め続けて……。
兄ちゃんが一番得意なあのステップを引き出して、紙一重で俺は兄ちゃんを止めた。

でも——ア、い、は、俺の中のなんだったんだろう……。

冴と対峙した凜の中に、猛烈にわき上がった破壊衝動。
初めてのようない、久々のようない……血が躍る感覚。
自分の中に、抑えようのない暴力性が眠っていたことを、凜ははつきりと自覚した。

だらしく舌を出し、血に飢えた獣のような凜を見て、冴はこう言った。

——何だお前……まだその表情できんじやねえか。

兄ちゃんは、俺のアイを知ってたんだろうか——。

俺自身も知らなかった、破壊的で快樂的な衝動戦法……。

兄ちゃんはずっと、俺のあのエゴを……俺に求めてたんだろうか。

ふと、また兄の面影を追い求めそうになって、凜は下唇を噛む。

……いや。それでも最後は、俺じやなく潔を評価した……!!

誰の目にも明らかだ。

あの試合、全てを手に入れたのは潔で——。

俺にはまだ、何かが足りなかった。

かつて、兄と並んでアイスを食べた堤防で。
海岸線に沈んでいく夕陽を前に、凜は誓う。

俺は、変わらなきや。

新しくならなきやいけない。

糸師冴と——潔を潰すために。

「おー！ またやってるぞ！ 録画、録画！」

『俺が日本を、U-20W杯で優勝させます。』

朝のニュースでも流れた潔のインタビュー映像を観て、父は大はしやぎでリモコンを手
に取った。

俺^{おれ}は変わ^からなきや

新^{あた}しくならなきやいけ^{ない}

潔^{ごやう}を潰^{つぶ}す
ため^に

糸^{いと}師^し
冴^{さえ}と

「世っちゃんのインタビュ―？ 観る、観る！」

夕食の用意をしていた母も、テレビの前にやつてくる。

「もういいよー。同じでしょ。」

潔は苦笑しながら食卓についた。

「はい♪ 世っちゃんの好きなカツカレー！」

「おー！ 美味そー！」

母から皿を受け取って、手を合わせる。

野菜がごろごろ入ったルーに、揚げたてホカホカのカツがぜいたくに一枚分のつた、ボ

リューム満点のカツカレーだ。

「Uー20W杯で勝つかレーだろ!? な!? 母さん！」

父は、潔が帰ってきてからずっと上機嫌だ。

「でも、大変だったでしょ、『青い監獄』の生活？ すごい人たちのなかから勝ち上がった

だけでもすごいのに！ ゴールまで決めて、世っちゃん本当にすごいよ！」

「うん！ ただゴトじゃないよ、これは！ 父さんも母さんも母さんもサッカーのことわかんない

けど、嬉しい！　すごい！　世一！」

両親に褒められると、なんだか誇らしくもあり、少し照れくさくもある。

「はは。ありがと。だからもういいってー。」

潔は笑いながら、カレーをほおばった。

「でも父さんはなあ、世一が何かに夢中になつてることが、一番嬉しいんだあ。」

「ん？」

父の言葉に、潔は顔を上げる。

優しい顔つきで、父は言う。

「本当は、ゴールを決めるかどーかなんて、両親からしたらどっちでもいいの！

英雄で

も凡人でも、世一は世一だし！」

「うん。そーそー！」

母も、強くうなずいた。

「世一が望んだコトをして、一生懸命生きてるだけで、俺は嬉しい！」

眉尻を下げて、くもりのない言葉で、父はそう言った。

「そうよ。勝つても負けてもどこにいても、私たちはずっと世つちやんの味方だから——
生きたいように生きなさい。」

二人の言葉に、潔の胸がじわりと温かくなった。

「……うん。ありがと。」

一人きりで勝ち上がらなければならない“青い監獄”は、孤独との戦いだ。

でも、どんなに悔しい思いをしても、強いプレッシャーに負けそうになっても、絶対に
この道を諦めたくない。

そんな自分を、無条件に応援してくれる両親がいる。

それは、何よりも心強かった。

「世界一になるぞー！」

両親に向かって、改めて決意を口にした。

「あら！ 潔世一選手の新たな宣言!？」

「サインくださーい♪」

ふざけた調子の父に、三人で笑い合う。

久しぶりに食べたカツカレーの味を、潔は噛みしめた。

夕食後。ベッドに寝転んで天井を見上げながら、さっき言われた言葉を思い返していた。

（生きたいように生きる……。エゴイストって、そーゆーコトなのかもしれない……。）

“青い監獄”で俺は変わって……。その結果が、今の俺で……。

あのころ、想像もできなかったような、何者かになれたのかもしれない。

——でも。手放したモノもいつばいある。

勝つためには、ときに残酷にならなければいけない。

自分にも、他人にも。

入寮テストで脱落した吉良涼介のことは、尊敬していた。

二次選考で戦った成早朝日は、プレーにおける大切なことを教えてくれたチームメイトだ。

半分こしたステーキを食べながら夢を語っていた國神の姿は、今でも忘れない。脱落していったみんなの上に、今、自分は立っている。

（……それでも、俺は知ってしまった。「勝つ」という昂りを……「得点」という快感を。）

俺の力で、世界を変える『悦び』を――。

そうだ。この道の先に、世界一が待ってるのなら。
早く、あの戦場に戻りたい。

“ブルーロック”で生きたい!!

自然と、握ったこぶしに力がこもる。

この熱を、高まりを……早く試したくてうずうずしていた。

そのとき、不意に潔のスマホが鳴った。

ポップアップされた通知の差出人は——『青い監獄』の帝襟アンリ。
急いで、メッセージの内容を確認する。

『BLUE LOCK PROJECT 再始動のお知らせ

△月〇日 十三時 『青い監獄』に集合すべし

※例によつて詳細はシークレットとなっております、問い合わせには一切お応えできません。』

……きた！

物々しい注意書きすらも、もはや気にならない。

そうだ

この道の
先に

世界一が
待ってるのなら

はや
早くあの戦場に
戻りたい——

青い監獄で

生きたい!!!



何が待ち構えていても、あの場所に戻るなら、それでよかった。

ここからまた、新たな挑戦が始まる——！

潔と同じく、選考を通過した「青い監獄」メンバーも、通知を受け取っていた。

「お。ヤバ♪」

蜂巣や千切、凧は、渋谷のセンター街で。

「……キタか。」

我牙丸は、深い山奥で。

「つしやあ!!」

イガグリは、実家の寺で。

「次は……クロス……。」

雷市は、割れそうなほどスマホを握りしめながら。

「レディース&ジェントルメン♪」

土道龍聖は、浴室で不敵な笑みを浮かべて。

おのおの 各々が、次の挑戦ちようせんに向けて、静しずかに闘志とうしを燃もやしていた。

——そして、約束やくそくの日。

“BLUE LOCK”の文字もじが刻きざまれた五角形ごかくけいの建物たてものの前に、複数ふくすう台だいの大型おおがたバスが停とまった。

無機質むきしつな青色あおいろの建物たてものの周りまわりを、報道ほうどうヘリが飛とび交かっている。待ち構かまえていたように、取しゅ材陣さいじんがバスを取り囲かこんだ。

降り立おたった潔いさぎは、そびえたつ監獄かんごくを見上みあげる。

さあ、新たなる次元じげんへ!!

世界せかい一のストライカーへ!!

ブルーロック プロシエクト フェーズ・ツー
“青い監獄” 計画 第二段階——始動!!